

文語日誌（平成二十八年一月二十五日）

戦前如何なる文語教育のなされしかは、今日文語を學ぶ者にとりて甚だ興味深き事柄なり。その一端を知るには舊制中學校に於きて實際に使用せられたる教科書を讀むに如かずと覺ゆ。

此の度昭和十二年文部省檢定濟み中學國文科用教科書「新修最新漢文讀本」全四冊揃（富山房發行、文學博士服部宇之吉編）を入手したれば、その内容を紹介せむ。

第一冊、目次の劈頭を飾るは、日本書紀より「皇祖建國」なり。『神武天皇號して神曰本磐余彥尊と曰す』（原典は『始馭天下之天皇 號 はつくにしらすすめらみこと なつけたてまつりてかむやまといはれひこひこほほでみのすめらみこと 曰神日本磐余彥火々出見天 皇 とまをす 焉』なるも刪修せらる。）とあり、橿原神宮の寫眞も掲載せらる。次いで、皇朝史略より「民を以て本と爲す」（仁徳天皇）を配す。曰く、『一日天皇臺に登りて遠く望みたまふに人煙起らず』と。次いで、「先哲叢談」より、近江聖人（中江藤樹）、『農夫曰く、藤樹先生を欽仰すること豈に惟だ余のみならんや』云々、更に熊澤蕃山、荻生徂徠など續く。このほか格別に注目すべきは、頼山陽の作品羣、全體の半ば近くを占むることなり。

「日本外史」よりは「重盛の忠孝」（『忠ならんと欲すれば孝ならず』）、「頼朝兵を起す」（『平治之亂に左馬頭敗死せり。其の第三子を頼朝と曰ふ。鬼武者と稱す。時に年十三。』）、「宇治河の先登」（『先なる者は景季、後なる者は高綱也。高綱後より景季をあざむきて曰く、子の馬條ゆるめりと』）、「一谷之戰」（『太だ險なり。人馬行くべからず。唯だ鹿のみ之を踰ゆと。義經曰く、鹿も四足、馬も四足、等しき耳と。』）、「元寇」（『虜兵十萬、脱して歸る者わづかに三人のみ。元復び我が邊を窺はざりしは時宗之力也。』）、「湊川之戰」（『汝幼なりと雖も己に十歳を過ぎたり、猶能く吾が言を記せん。今日之役は天下安危の決する所なり。意ふに吾汝を復び見ざらん。汝吾己に戰死せりと聞かば、則ち天下は盡く足利氏に歸せんことを知る可き也』）、「川中島之戰」（『刀を擧げて之を撃つ。信玄刀を抜くに暇あらず、持てる所の麾扇を以て之を打ぐ。』）など。「日本樂府」よりは「蒙古來」（『筑海の颯氣天に連りて黒し』）、「不識庵機山を撃つ之の圖に題す」（『鞭聲肅肅夜河を過る』）など。名文家頼山陽への傾倒、かくも顯著なれば、戦前の人々の文體に與へたる影響は測り知れずと察せらる。

第二冊以降は、曾先之、司馬遷、李白など漢土の作品も幾分比重を増すとはいへ、なほ川田剛「傳統無窮」、那珂通世「漢土開化」、大日本史「中臣鎌足」、岡千仞「吉田松陰」、重野安繹「霞關臨幸記」、など邦人作品中心を占むる傾向に聊かも變化なし。第四冊附録には、文天祥「正氣歌」（『天地正氣有り、雜然として流形を賦す』）、藤田東湖「和文天祥正氣歌」（『天地正大の氣、粹然として神州に鍾る。秀でては不二の嶽と爲り、巍巍として千秋に聳ゆ』）を収録す。この四冊の教科書、今後とも熟讀玩味せざるべからず。

（平成二十八年二月十二日受附）